

“スウィング”とはごく端的に言えば気分である。発生当時のブルース、ロックン・ロール、ファンク、パンクがそうであったように、本来は、厳密に規定されたリズムなどではなく、ある気分、雰囲気、またはそれにともなう身体的な現象を指す言葉であったはずだし、未だにそうであるに違いない。

禁酒法廃止と経済復興に沸く1930年代半ばから1940年代前半のアメリカを象徴するように、華やかに躍り彩ったスウィング・ジャズ、ボブ・ウィルスがテキサスで巻き起こしたトルネード級のウエスタン・スウィング、ひとりの偉大な巨匠によってバリで咲いたジブシー・スウィング、ロックン・ロール・チルドレンが選べるルーツ探しの先に辿り着いた故郷とも言うべきアコースティック・スウィング、ビッグ・バンドに反骨精神を添えて疾走するパンク・ジェネレーションならではのネオ・スウィングなどと、“スウィング”が付されたこれらの音楽は、形態こそ違えど、気分においては確かに共通しているものがある。それこそが“スウィング”だ。粋で、洒落で、軽快で、陽気で陽達、しかしそれだけではなくノスタルジックでセンチメンタルな風情もあり、温かく染み入る。そんな気分。言葉にすればこのように語るだろうか。単純明快に楽しめるのに味わいは複雑に深い。デューク・エリントンがスウィングとはかくあるべしと示した名曲「It Don't Mean A Thing If It Ain't Got That Swing (＝スウィングしなけりゃ意味がない)」のタイトルに託された真意

とは、このような見地からこそ理解できよう。

そして今、そういった気分が時代の空気と合致するなか、“スウィング”な音楽が多くの人から求められている。ブライアン・セッツァーが牽引するネオ・スウィングの人気は言うに及ばず、70年代の隠れた名盤たちが“アコースティック・スウィング”という名の下に発掘、CD化され、ジャンゴ・ラインハルトの今の感覚での再評価、また彼の後継者たち、つまり今を生きるジブシー・ギタリストたちのオーバーグラウンドでの活躍、はたまたオルタナ世代による枠にとられない新種のスウィング・バンドの登場などにより、甚だはいわゆる“スウィングもの”が花盛り、一部の地味な音楽愛好家だけのものには収まらない、ひとつの大きな潮流となっている。そして、それらの音楽の多くは、他でもなくギターが、その音楽性の主軸を担っているのである。

本企画は、そのような動きを受けての一大スウィング・ギター特集である。スウィングな気分に合わせてくれるギター、すなわち“僕らのスウィング・ギター”をキーワードに、スウィング・ギタリストをフィーチャーするだけでなく、スウィングなアーチトップ・ギターについてや、初心者でも気軽にスウィングできる奏法ノウハウなどを交え構成している。読むも良し、弾くも良し、存分に楽しんでいただきたい。そうして、“スウィング”な気分にはたってもえれば、嬉しい限りである。

SWING  
★  
GUITAR  
★

企画/構成：編集部

# スウィング ギター